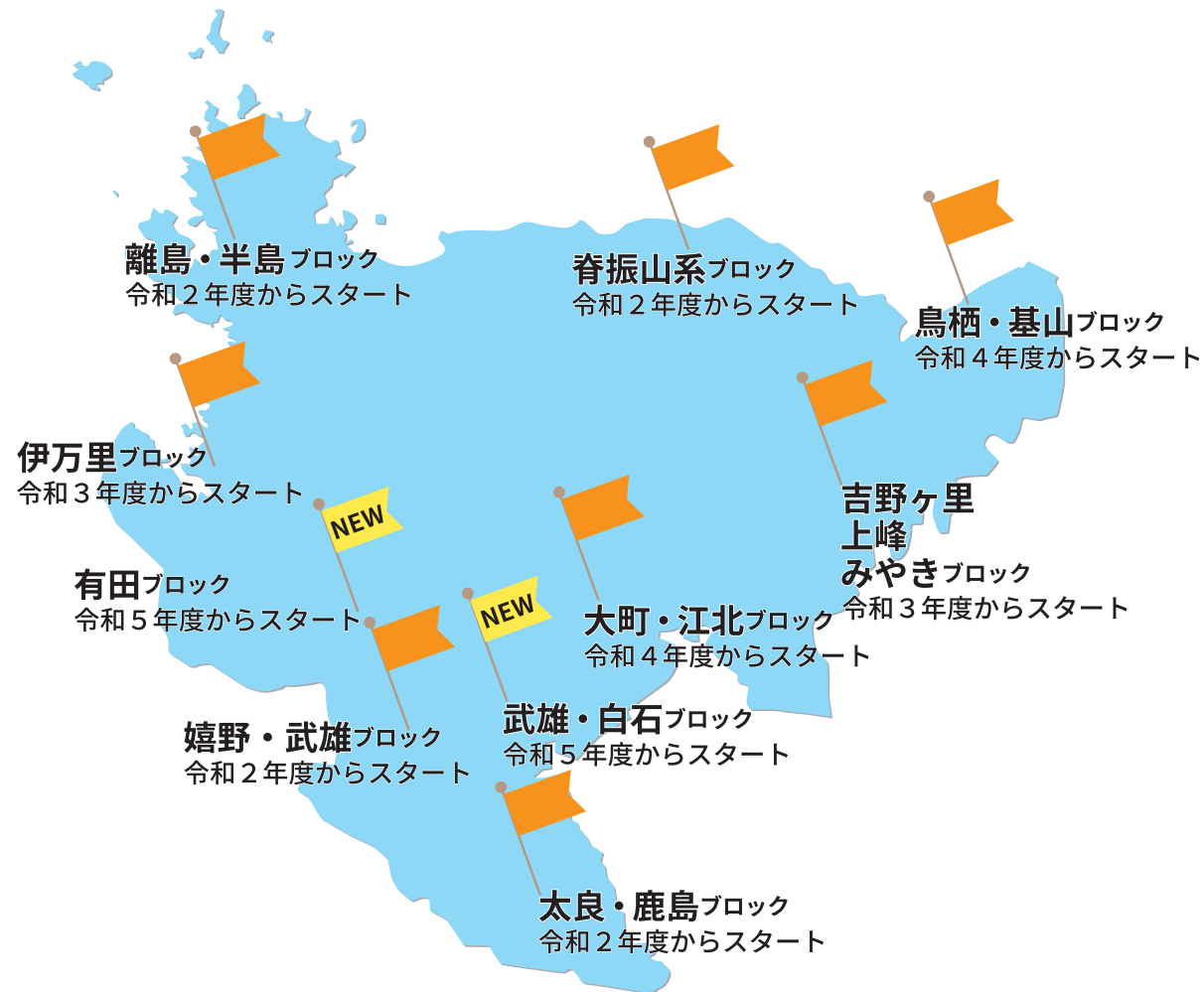


山の会議(仮)[®]

2023 YAMANOKAIGI(KARI)



山をまもり、のこし、
未来へ伝えるために、みんなで語る場。



CONTENTS

山の会議(仮)とは？	03
有田ブロック	04
武雄・白石ブロック	06
大町・江北ブロック	08
鳥栖・基山ブロック	10
吉野ヶ里・上峰・みやきブロック	12
伊万里ブロック	14
太良・鹿島ブロック	16
離島・半島ブロック	18
嬉野・武雄ブロック	20
脊振山系ブロック	22
合同発表会・大交流会	24
ブロック間対談	26
出張！「山の会議(仮) in 東京」	27
佐賀の山の魅力・1(黒髪山)	28
佐賀の山の魅力・2(基山)	30
佐賀県知事からのメッセージ	32

山の会議(仮)とは？

「山の会議(仮)」は、これからの山の暮らしや地域で取り組みたいことなどを多様な人々(住民、移住者、山や自然に関心のある人)で語り合うことによって新たなネットワークを作り、そこから未来へつながる地域全体の自発的な“山活”の輪が広がり進化することで山の地域がより輝くことを目指しています。

「山の会議(仮)」の名称は、地域で話し合いを進めていく中で、各ブロックの取り組みはもとより、名称も自分たちで作り上げていただきたいという想いから「(仮)」を付けています。「山の会議(仮)」は、これからの山の暮らしや営みを持続可能にする、はじめの一歩です。

地域が抱える課題はそれぞれ。ひと昔前からのテーマもあれば、時代の変化によって生じた課題もあります。各ブロックの有志のみなさんは何度も集まり、解決に向けて自発的に取り組んでおられます。

現在、「山の会議(仮)」がきっかけで生まれた自発的な“山活”の輪はさらに広がり、進化し続けています。「志」をもった地域の人同士が密接につながり、そこに旗を立てることで、よりたくさんの方が集う。人の力とアイデアが相乗し、予想もしなかったことが実現するかもしれません。

その地域にしかない「本物」の地域資源や価値、可能性をみんなで語り合い、みなさんの想いを発信する場、新たな交流のきっかけになる場、地域による地域のための地域のみんで考える、それが「山の会議(仮)」です。



有田ブロック

世界に誇る“ARITA”の強みを生かし、町の素晴らしさを多角的に発信。

[山の会議(仮)in 有田町三夜公園 / 2023.11.04]



有田焼、農産物、豊かな自然、素晴らしい街並みなど有田町のポテンシャルをみんなで引き出していこうと「佐賀さいこう」ポーズ。

2023年11月4日、アリタセラのすぐそばにある三夜公園にて有田ブロックの「山の会議(仮)」が開催された。年齢も職業もさまざまな人たちが集い、我が町を元気にするにはどうすればいいかをざっくばらんに語り合う貴重な場である。

ところで、有田町と聞いて誰もが真っ先に思い浮かべるのは、やっぱり有田焼だろう。

日本のみならず世界中に知られている小さな町、それが有田町であり、人口約2万人のコンパクトな町が世界とつながっているのだ。そのこと自体とても素晴らしく、稀有な例と言っている。

誰もが認めるように、それはとりもなおさず400年の歴史を誇る世界的なブランド・有田焼の知名度ゆえなのだが、有田町の素晴らし

しさはそれのみにとどまらない。会議では、そうした事実があざやかに浮かび上がった。

具体的には、山があり、自然があり、伝統的な街並みがある。黒髪連山の豊かな自然や、岳の棚田等の美しい景観に恵まれた町。

水がきれいで、農業、畜産業も盛んだ。幼稚園から大学(佐賀大学有田キャンパス)まで教育機関が揃っている。加えて、温泉も。

参加者それぞれが自分なりに感じている町の素晴らしさを語り、それを集約してゆく中で有田町のポテンシャルの高さが共通認識として像を結んでいった。

参加者は「今は焼き物オンリーだけど、その強みを生かして、街並みや自然を含めた景観のよさ、農産物の三点セットでアピールしていきたい」と語り、それを聞いた参加者は

「岳の棚田と夕陽のコントラストは、たくさんの人を惹きつけると思います。日本棚田百選の一つであり、『つなぐ棚田遺産』にも認定されています。一度来た方は必ず喜んで帰られますよ」と返す。

また、他の参加者は「海外の人に陶芸体験を売っていきたい。三ヵ月ごとにオランダからアーティストを招聘しているんですが、実はそれってヨーロッパで一番人気のあるプログラムなんです。50倍の競争率を勝ち抜いてアーティストが有田を訪れる。それくらいARITAの名称は世界で知名度が高い。でも、地元の人がそれを知らない」と訴える。

それをきっかけに町民自身が有田焼や有田町について知らないことが話題になり、有田町の(株)深海商店13代目である深海宗佑さんからは、「町民自身が有田のファンになって、なにかやりたいという意欲やできることに気づく。それが重要だと考えます」という意見が出た。

それに対して「町の素晴らしさを知ることのできる機会やコンテンツが必要と感じるね。ケーブルテレビを使って情報発信はどう?」「岳の棚田でキャンプやバーベキューをやって、町民の交流の場にしたらどうでし



A~Fの六つのグループに分かれ、有田町の素晴らしい点やいいなあと感じている点、あるいはここは改善が必要と思う点などをざっくばらんに挙げてゆく。

ようか?」といった若い人からのアイデアが出るなど会議は次第に熱を帯びてゆく。

そう、この熱は「山の会議(仮)」が大切に考えていることの一つ。屋外の開かれた空間ということも影響しているのか、微笑あり爆笑ありの中にも真剣な眼差しがあり、さまざまな意見やアイデアが飛び交った。

自発的な地域づくりは、立場の異なるいろんな人が顔を突き合わせて語り合う中に生まれる熱の量が鍵を握っている。

なぜならば、たった一人では思考や発想に限界があるから。多様な視点から語り合うことで光が射し、未来への新たな道筋が描かれるのだろう。



①老若男女が顔を突き合わせて、ざっくばらんに言葉を交わす。みんな笑顔で和気あいあい。「山の会議(仮)」のいつもの風景である。



②会議に先立って参加者が楽しんだ「有田焼/クレー射的」。有田朝飯会・高田亨二(たかだりょうじ)さんの企画。



③有田の伝統産業に更なる価値を創造する若き後継者、深海宗佑(ふかうみそうすけ)さん。

武雄・白石ブロック

六角川の流れて、人と人、町と町がつながる未来。

[山の会議(仮)in 武雄温泉保養村わんぱく広場 / 2023.11.23]



武雄といえば、誰もが思いつくのは武雄温泉だろう。しかし、ここで暮らし活動する人々の目は知る人ぞ知る自然の素晴らしさへ向けられていた。

武雄市と白石町をつなぐように流れる六角川。このブロックには、川を活用して市町の垣根を超え、川の流域でつながって地域を盛り上げたいと考える人が大勢いる。

その思いを体感しようと、「山の会議(仮)」はカヌー体験からスタート。吉野ヶ里・上峰・みやきブロックでカヌーなどを活用したレジャーチャートライアスロンを催している川田修三さんを講師に迎え、カヌーを通して地域の自然を感じてみようという試みだ。

フィールドは、武雄温泉保養村下にある池ノ内湖。春には池の周囲に200本のサクラの

木が花咲く。川田さんの指導の下、参加者はカヌーに乗り込み、スイスイ散らばってゆく。乗り込む際の不安な顔が、湖面に出るやいなや子どものような笑顔に変わる。船の上でのアイスブレイクタイムを終え、湖畔のふれあい広場に移動して「山の会議(仮)」へと移る。

まずはコーヒーショップ喜蔵の原田裕久さんのデモンストレーションにより、タープの下でグループごとに手挽きのコーヒーを淹れる。美味しいコーヒーを飲み、場が温まったところでグループごとに地域の素晴らしさを語り合う第一部が始まった。

前述した六角川のほかに、樹齢3000年の大楠、ミネラル豊富な土壌で育つ白石の玉ねぎや蓮根などの農産物、白石平野、山容が特徴的な山など、豊かな自然の恵みに目を向

白石高校の小林さん。「いろんな職業の人の話を聞いて参考になった。地域の自然のよさに気づけた」と話してくれた。



地域の課題解決策として、「棚ディアンミュージックフェスティバル」への参加を提案した発表者、永代優仁(ながよまさひと)さん。



白石町に500年続く郷土料理「須古寿し」店をオープンし、未来につなぐ江口智子(えぐちともこ)さん。カヌーで自然を五感で体感。



菓子職人の小屋デタント・相森真一(あいもりしんいち)さん。水害を乗り越えて先代から受け継いだ故郷の土地で再スタートされている。

ける人が多かった。中には「都会がなくなったものがすべて残っている」という人がいたり、「子ども向けの教育機関が多く、子育てしやすい」「お節介な人が多いおかげで、横のつながりが強い」と評価する移住者がいたり、会議は真剣さの中にも笑いありで進む。

人のつながりでいえば、月一回地域住民が集まってお酒を飲む「三夜待」が話題になった。さらには、1300年の歴史ある武雄温泉などの観光資源と武雄市立図書館のような新しいモノが共存していることも素晴らしさの一つという見解も。その一方で、災害や少子高齢化などの解決策を話し合いたいという切実な声も聞こえた。

続いて、地域の未来について語り合う第二部へ。交流の場づくりや受け皿整備が共通の課題として挙がり、それらを包括して解決できる具体策として高齢化により担い手が不足する「棚ディアンミュージックフェスティバル」に他のエリアの方も参加しようという提案に会議は熱を帯びる。

これは、すでに行われているスポンサーやプログラムのしっかりした事業に新しい人材

を参入させて人脈を広げることで、自分たちのやりたいイベントにつなげる仕組みを構築できるのでは、という考えである。

また、六角川の利用方法についても活発に意見交換がなされ、川を活動の拠点としている六角川川の学校・下田代校長は「流域全体で交流を図れるイベントの実施によって農産物や魚介類をPRする場をつくり、最終的には防災対策にもつながれば」と話す。それに対して、流域でマルシェを開催してはというアイデアが出た。

「ガタリンピックの成功は、そこでしか体験できないコンテンツだから。六角川も潮の満ち引きの激しさを生かし、『月の引力を感じられる川』といったキャッチコピーで展開できるのでは」というユニークな案をはじめ、「流域の各拠点にキーマンがいて、話を聞いたり接点を持ったりする機会を設けてはどうか」という提案もあった。

知られざる地域の素晴らしさを自分たちがまず理解し、それをいかに生かすか。川の流れて人々がつながる未来が見えた会議だった。



タープの下で行われる青空会議。さまざまな年代、職業の人が集まり、ときには真剣に、ときには笑顔で地域のことを語り合う。

大町・江北ブロック

子どもたちの瞳が輝く地域風土を
住民みんなの手でつくりたい。

[チャレンジサマーキャンプ in 江北町 / 2023.09.02]



子どもたちが最も喜んだ水鉄砲づくり体験。
作ったあとは鉄砲を手に撃ち合いっこ。



澁谷善寿さん(しぶやよしとし/左端)の案内で岳地区を周遊ウォーキング。



ため池でカヌー体験。あちらこちらから子どもたちの歓声上がる。



生地づくりから始め、最後は災害時に活用できる段ボール製の窯で焼き上げる。

まだ盛夏の勢いが残る2023年9月2日、江北町の白木パノラマ孔園で「チャレンジサマーキャンプ」が開催された。2022年の「山の会議(仮)」で発案され、若手農業者グループのベリーボタン、江北町女性ネットワークの会、佐賀山の学校、SAGASOW、大町町地域おこし協力隊などが主催に名を連ねる真夏の一大会イベントである。

江北町の岳地区をめぐる周遊ウォーキングに始まり、カヌー、水鉄砲づくり、竹飯盒、スイカ割り、段ボールで焼くピザ作り体験などメニューは盛りだくさん。とにもかくにも親子で自然体験を楽しんでもらうことが眼目

で、とりわけ地域の素晴らしさを子どもたちに伝えたいという思いからの企画である。

朝8時、主催者からの説明、激励に駆けつけた山田恭輔町長の挨拶のあと、参加者は二班に分かれて、次々にプログラムにチャレンジしてゆく。そんな中、子どもたちの眼が最も輝いたのは、水鉄砲づくり体験だった。

竹や布など材料を用意したのは、郷土愛を語る江北町の中田区長たちだ。つくり方も彼らが教える。真剣な表情で説明に聞き入り、その巧みな手さばきを見つめる子どもたち。

時代をつくってきた世代と未来を担う世代が同じ時間を共有し、笑顔で言葉を交わす。

なんと貴重な機会だろう。ほっこりとした空気が漂う中、誰かの「こんな場がもっとあればいいのに」という呟きが胸に沁みだした。

親たちは、水鉄砲遊びに夢中の子どもたちのかたわらでピザ作り体験にチャレンジ。なにしろ小麦粉をこねて生地から作る趣向だか

ら大変だ。そんなこんなで、瞬く間に時間は過ぎてゆき、テント設営、夕食のカレー作りへと進み、やがて夜は更けていった。

子どもたちの屈託のない笑顔が溢れた一日。これこそ家族の支え、地域の宝。その思いを強くしたキャンプイベントだった。

「山の会議(仮)」で生まれたつながりを それぞれの活動の場で活かしてゆく

[深掘り会議 in 江北町 / 2023.09.03]

翌日は、「佐賀のへそ・ふれあい交流センターネイブル」にて、前日のキャンプの振り返りや今後の取り組みについてのグループワーク「深掘り会議」が行われた。まずは、若手農家グループ「ベリーボタン」代表の北原良太さんがファシリテーターを務め、記憶が新しいうちにキャンプの振り返りを行った。

「プログラムは充実していたが、詰め込みすぎでは?」「カヌーから見る景色が地元ながら新鮮だった」「夜のプログラムもあってよかったのでは?」「昼の部だけの参加もあっては?」など具体的な意見が次々と挙がる。

山の学校、カヌー、農家、竹細工講師などさまざまなスキルを持った人材が豊富なこの地区。企画段階でアイデアが溢れ、出来上がったプログラムだった。

感想としては、北原さんの小学1年生の息子さんの「昨日にタイムスリップしたい」という言葉がすべてを表しているようだった。

その後、今後の取り組みや可能性を話し合う。地域の素晴らしさや強みとして共通していたのは、人間力とそのつながりの強さ。

「東京に出た人が戻ってくる。その理由には癒される景色や人の柔らかさがある」「自分の知識や経験、思いを子どもたちに伝えていこ



地域のことを考えるきっかけになったという白石高校の福田さん。

うとしている人がいる」「江北町女性ネットワークの会や農家の方の活動を見ていると、この町は人と人とのつながりが非常に密接だと感じる」「町のよさを発信する力のある人材を育てることが重要」といった意見が挙がる。

北原さんは、「山の会議(仮)」によって広がった人のつながりが新しい流れを生んでおり、それを今後も継続して続けることが大事だという。

「それぞれがそれぞれの団体に活動している。山の会議(仮)という緩いつながりがあって、そこから生まれた連携やアイデアをもとにそれぞれの組織、団体が活躍してゆくのが一番。山の会議(仮)は、きっかけが生まれる場所。自分一人じゃキャンプもできないです」と笑顔で語る姿が印象的だった。



キャンプイベントの発案者で、深掘り会議のファシリテーターを務めたベリーボタン代表の北原良太さん。

■ベリーボタン 江北町の「food(作物)」と風土(歴史・文化等)の相互作用を目標に掲げ、マルシェなど農家に関するイベントを通して、まちの素晴らしさを伝え続ける若手農家グループ。

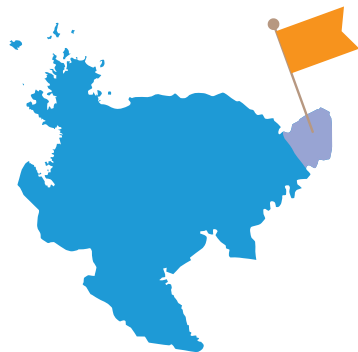


ベリーボタン

鳥栖・基山ブロック

みんなの夢をつくる挑戦、 「寺 de フェス in きやま」大盛況！

[寺 de フェス in きやま・基山町 / 2023.11.12]



予想をはるかに上回る盛り上がりを見せた「寺 de フェス in きやま」を記念して「佐賀さいこう！」ポーズ。

メインステージにて切れ間なくダンスパフォーマンスやバンド演奏が行われる中、はたらくるまゾーンやグルメゾーンには家族連れの列。スポーツゾーンでは、モルック体験やミニサッカー対決に子どもたちの歓声が上がリ、会場は一日中熱気に包まれた。

「寺 de フェス in きやま」は、2022年の「山の会議(仮)」で発案され、開催に至った基山町初の地域主体の野外型フェスである。

会場は、基山山麓にある瀧光徳寺の20万余坪の広大な敷地だ。メイン会場とマルシェ会場に分かれ、メイン会場のステージではアーティストによるライブやダンスコンテスト、そのほか中村学園大学や九州産業高校の和太鼓部、基山中学校吹奏楽部の演奏なども行われ、大いに盛り上がった。

会場後方には基山町商工会青年部作の夢ちようちんのモニュメントが空高く掲げられ、

来場者の願いごとが書かれた提灯が並ぶ。

スポーツゾーンで子どもたちのサッカーを見守っていたJリーグ・サガン鳥栖の高橋義希さんは、「このイベントを一緒になって盛り上げていきたい。サガン鳥栖と共に佐賀を盛り上げていけたら」と話す。

マルシェ会場は、子ども連れに嬉しい物販やワークショップが満載。子どもフリマやピザづくり、ボードゲーム体験、有田焼はし置きづくりをはじめ、なんとお坊さんコスプレ体験まである。山伏や弁慶、ダイラマに至るまで各国のお坊さんの扮装が勢揃いし、子どもたちに大人気だった。

この企画の実行委員を務める橋本高志さんに伺った、「寺 de フェス in きやま」開催実現までの経緯をまとめると次のようになる。

フェスのサブタイトルは「みんなの夢づくり、挑戦は継続へ」。そこに至るまでに何度

も会議を重ねて、まずこのイベントをやる目的を洗い出した。

これまで行われていたイベントは、地域の人々が地域の人々のために慣例で行っていたもの。それもいけれど、同じことの繰り返しでは可能性は広がらないし、新しい出会いもない。僕らが出会えないということは、子どもたちにも出会いがない。

みんなの望む地域の未来像を出し合う中で、共通のキーワードが「子ども」であることに気づいた。子どもが可能性を見つけれられる町。夢を与えるのではなく、子ども自身が夢を見つけれられる、そのきっかけづくりになるようなことをやろうという話になった。

幼少期にそういう経験があれば、たとえ地域を離れたとしても、いつかまた戻って来るのではないかと。人の顔が浮かぶ、戻って来なくなる地域をつくる。そうじゃないと、地域は続いていかない。橋本さんは、そんなふう

に熱く語ってくれた。

実行委員長の関野誠さんは、生まれは神奈川県で、北海道在住経験もある地域おこし協力隊員。そんなよそ者目線で見ると、基山町はその素晴らしさの一つでもある立地を生かせていないのだという。

つまり、基山町の中だけで完結すれば、分母は約17000人(基山町人口)で終わってしまう。しかし、近隣の小郡・鳥栖・筑紫野市を含めると25万人以上になる。もっといえば、ちょっと先には福岡市もある。外にも開かれたイベントを開催すれば、もっと大きな力になるのでは、と考えたそうである。

「有料にもかかわらず、こんなに来てもらえるとは思わなかった」とイベントが無事終了したあと、安堵の表情を見せた関野さん。

「今回は規模を縮小して、2年に一度でもいいのかな」という彼の視野には、継続することの大切さが間違いなく入っていた。



子どもたちにモルックの楽しさを教えるモルック鳥栖クラブの磯野さん。

実行委員長の関野誠さん。地域おこし協力隊として基山町を盛り上げるべく奮闘！



マルシェ会場には、子どもたちが喜ぶワークショップや物販が並んだ。



鳥栖は第二の故郷だというサガン鳥栖の高橋義希さん。



寺 de フェスならではのコスプレ体験にて山伏に扮装中。笑顔がいいね！

■NPO法人クールビートダンススクール 地域密着型のダンス教室の運営を実施。まちのつながりや地域資源を活かして家族みんなで楽しめる「寺 de フェス in きやま」開催にも尽力するなど、ダンスでまちに笑顔と明るさを醸成し、子どもの居場所づくりに取り組む団体。

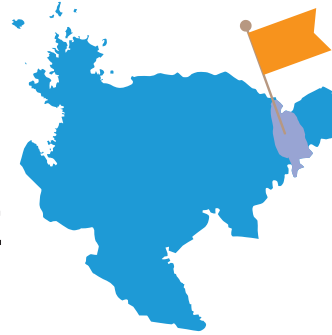


クールビート
ダンススクール

吉野ヶ里・上峰・みやきブロック

全国初の試み、「レジャトラ」を起爆剤に地域の素晴らしさを発信。

[レジャートライアスロン in みやき町 / 2023.10.29]



レジャートライアスロンのひとコマ。電動アシスト自転車で風を切って走る。

レジャートライアスロン、略して「レジャトラ」を通じて、みやき町の素晴らしさをもっと発信しよう。そんな思いのもと、NPO法人「山田の風」とSAGA SOW(佐賀センス・オブ・ワンダー)自然体験教室代表の川田修三さんを中心とする有志が立ち上がった。

「レジャトラ」と聞いてもピンとこないかもしれないが、それもそのはず、なんと全国初の試みなのだ。

簡単にいうと、「レジャトラ」とは、トライアスロンの要素を取り入れたアウトドア・アクティビティのこと。レジャー感覚で楽しめるのがミソで、長距離ラン・自転車・水泳から成る鉄人レースをハイキング・サイクリング・カヌーに置き換え、自然豊かなみやき町をめぐるとういう趣向である。

2023年10月29日、山田親水公園に集まった参加者は、「山田の風」代表の麻生恵博士(東京農業大学名誉教授)の説明を受けて、まず九千部八十八カ所霊場の一部を成す白坂山へ。すっかり秋の装いをまとった広葉樹の森をたどり、点在する石仏を拝み、植物や植生の専門家である麻生博士の話に耳を傾ける。

のんびりゆっくり白坂山周辺をぐるっと一周してハイキングを楽しんだあとは、電動アシスト自転車にまたがり、いったん山田親水公園へ。

そこから山道を少し登った鷹取山の山麓が「山田の風」の拠点だ。和蛸を獲るために鍋島藩が江戸時代に植えたハゼの森を眺めながら、スタッフの手作り料理で腹を満たし、再び自転車に乗って今度は街中に繰り出す。



白坂山ハイキングにて麻生博士の説明を聞く参加者。



「山田の風」スタッフの手によるキノコ鍋がふるまわれた。

綾部八幡宮の参道にある名物「ぼた餅」店を皮切りに、里山の風情や歴史的な街並みが残る町中を駆け抜ける。普通の自転車なら息が上がりそうな距離だが、電動アシスト自転車だから楽々で、気分も爽快。これが「レジャトラ」のいいところである。

さわやかな風を切って走り、目的地のお茶屋の堤へ。治水の神様と謳われる成富兵庫茂安が築いたとされる遊水池である。ここでカヌーを楽しむ。

SAGASOW代表の川田さんのユーモアを交えた指導のもと、太刀洗川から引いた水を満々とたたえる池にカヌーを浮かべる。

「奥へ行くとオシドリが羽を休めているかもしれないよ」という川田さんの言葉に胸を膨らませつつカヌーを進め、一時間あまりの小さな船旅を楽しんだ。

山があり、里山があり、町があり、川がある。そして、そこで暮らす人々がいる。それぞれが個別に存在しているのではなく、すべてはつながっている。それらを線で結び、みやき町の隠れた素晴らしさに触れる。それが「レジャトラ」の役目だろう。



鷹取山山麓の耕作放棄地が「山田の風」の拠点。



お茶屋の堤にてカヌー体験のひとつコマ。

山田親水公園に戻った参加者は、一様に笑顔。その生き生きとした表情が自発的な地域づくりに取り組む有志の活力であり、みやき町の未来を照らす光明になるに違いない。



「山田の風」のメンバー、左から麻生さん、寺崎さん、小森さんとSAGASOW代表の川田さん。背景はハゼの森。

■NPO法人山田の風 ハゼの森で知られる鷹取山山麓の耕作放棄地を拠点に、住民主体でみやき町の地域資源を生かした交流事業(蕎麦づくり、棚田ランチ、焚火キャンプ等)や白坂山の登山道整備などに取り組む団体。SAGASOWの川田代表と連携して「レジャートライアスロン」を開催し、注目を集めている。



山田の風



SAGASOW

伊万里ブロック

歩くという体験を通して 見えてくるものはたくさんある。

[おかしなまち伊万里 Part2in 伊万里市 / 2023.12.02]



左 / 伊万里津大橋で謎解きを楽しむ参加者。
下 / 「謎解きハンドブック」。これをもとに街中を歩き、ポイントごとのクイズに答えてゆく。



長年住んでいても、地元について知らないことは思いのほか多いものである。それは、おそらく生活の中心に通勤通学や買い物があって、日常の行動がある種パターン化しているせいだろう。

でも、土地の名前にも通りの景観にも、あるいは毎日渡っている橋一つにも今に伝わる謂れや歴史があって、見落としているお宝や未来につながるアイデアの源泉が眠っているかもしれない。

だから、自分の住んでいる町をもっと歩こう。街歩きイベント「おかしなまち伊万里」には、そんな思いが込められている。

ただ、単に歩くだけでは面白くない。そこで、2021年の「山の会議(仮)」をきっかけに、主催のNPO法人「まちづくり伊万里」(早田文昭理事長)のスタッフは、「くすのき社」の平野智也社長、伊万里高校#キセキ部などの協力を得て、楽しみながら歩けるアイデアはないかと知恵を出し合った。

そこから導き出されたのがクイズ形式の謎解き街歩きだった。具体的には、伊万里駅ビルにある伊万里市観光協会で購入できる「謎解きハンドブック」を手がかりに、七つのポイントに設置された二次元コードをスマホで読み取り、クイズに答えながら歩くという趣向である。

二回目となる今回は、サブタイトルに「怪盗スプーンVS子ども探偵団」と銘打ち、2023年12月2日～2024年3月31日にかけての土・日・祝に開催。ロングランだから、自分の都合に合わせて参加できるという寸法である。

その初日、「駅前広場のどこかにハートマークがあります。それを探してから歩きましょう」という早田さんの提案に、参加者の岩楯忠介さん親子は地面に目を落としながら広場をうろろる。

ちなみに、岩楯さんは鹿児島生まれの東京育ち。社会人になってからはライターとして

東京で暮らしていたが、六年半ほど前に伊万里市へ越してきた。

理由は、イラストレーターである奥さん・愛久美さんの実家が伊万里で、二人の娘さんの成長に伴って引っ越しを考えるようになった頃、特に東京にこだわる必要はないと考えたからだという。

「東京から移住してきた際、最初は疎外感とかあるのかなあと心配だったけど、ここは商人の町として発展してきたところで、人も町もとても開放的なんですよ。それですぐに打ち解けました。僕も妻も仕事がフリーランスだったことも大きいかな」と岩楯さん。

そして、「なにしろ窓を開けたら外は山。海もすぐそこにある。生活にしろ、子育てにしろ、こんな素敵な環境はない。今では伊万里を語らせたなら三本の指に入るといわれているほど馴染んでいます」と笑う。

閑話休題。「ハートマーク、あった!」とい

う声が響いたのは、探し始めて20分ほど経ったころだった。ウォーミングアップのハート探しを終え、参加者一行は町に繰り出した。

各ポイントを順に回りながら、古伊万里(伊万里焼)の積み出し港として栄えた歴史やお菓子の町といわれる由縁などに触れていく。

日本とヨーロッパを結ぶセラミック・ロードの出発点だった伊万里津、古い市場に明かりを灯すお洒落なパン屋、海辺に軒を連ねるかつての磁器問屋、古伊万里通りに店を構える菓子本舗。

視線を移せば、南に腰岳と黒髪山、北には穏やかな伊万里湾。その間に広がる街並みには、しっとり落ち着いた雰囲気が漂っている。「ああ、いい町ですねえ。あらためてそう感じました」と参加者の一人。その感慨深げな言葉に街歩きイベントの素晴らしさが凝縮されている。歩くという体験を通して見えてくるものは、思いのほか多い。



駅前広場のアスファルトに置かれた小さなハートマーク。見つけた人には幸せが訪れるとか。



駅前広場にある最初のポイントで、二次元コードを読み取る岩楯さん。六年前に東京から越してきた移住者である。



駅前広場で開会の挨拶をする「まちづくり伊万里」理事長の早田文昭(はやたふみあき)さん。



伊万里津大橋から望む伊万里川河口の景色。ここが日本とヨーロッパを結んでいたセラミック・ロードの出発点である。



お洒落なパン屋「umepan」。ロゴをデザインしたのは、東京から実家のある伊万里市へ移り住んだ岩楯愛久美さんだ。

■NPO法人まちづくり伊万里 伊万里における着地型の観光を目指し、多岐にわたる分野の人同士のつながりを広げ、伊万里ならではの地域資源を活かした「伊万里謎解きツアー」を開催するなど、伊万里のファンを増やし、伊万里の素晴らしさを伝え続ける団体。



まちづくり伊万里

太良・鹿島ブロック

身近な自然の素晴らしさを
一番近くにいる人に伝えたい。

[山の日記念登山 in 太良町 / 2023.08.11]



太良町のイベント「山の日記念登山」多良岳にはたくさんの参加者が集まった。

山と海が近い太良・鹿島ブロック。多良岳の山麓にはミカン畑が広がり、有明海では竹崎カニを代表とする多種多様な海産物が育まれる。そんな大自然を拠点に活動しているのが池田清哉さんである。2020年の「山の会議(仮)」をきっかけに「多良岳を愛する会」を発足させ、その代表として積極的に活動を続けている。

特筆すべきは、登山を通じて学校教育に関わっていることだ。2020年から取り組みを始め、現在、太良町内のすべての中学校、高等学校で「山の授業」=多良岳登山が授業の一環として組み込まれている。

中学校は1年生時、高等学校は2年生時に行われる。そのため、3年間で一回は全員多

良岳に登ることになる。登る一週間前に教室で座学を行い、多良岳の自然や歴史について学ぶ。

「今の子どもたちはラッキーですよ。こんな授業は、私が小さい頃にはなかった。今では当たり前になり、子どもたちも町の人たちもすごくいいねと言ってくれています。できれば、小学校の授業にも登山を取り入れてもらいたいんですけどね」と池田さん。

現在、小学生向けの活動には、5、6年生を対象としたリーダー研修がある。

さらには、お年寄りも山に連れ出した。2023年には社会福祉協議会と協力して、高齢者を対象に金泉寺まで歩くイベントを開催。金泉寺は空海が修行した場所で、死ぬま

で一度は行きたいというおじいさん、おばあさんが多いそうで、75歳から85歳までの20人が参加した。そのうちの二人を山頂まで案内したそうである。

また、ユニークな試みが恋活登山イベントだろう。2023年3月に第一回を開催。残念ながらカップル成立には至らなかったが、友だちの輪は確実に広がった。出会いの場をつくることで、少しでも人口減少の歯止めになればと2024年4月に2回目の開催を予定している。

太良町在住の池田さんだが、「山の会議(仮)」を通して鹿島市の人とのつながりや取り組みも増えたという。

「一昨年の深掘り会議では鹿島の若い人が増えていて、それ以降活動がすごく広がりました。食べられる植物ツアーをしたりしてね。引き出しがものすごく増えました」

太良町と鹿島市が一緒に取り組むだけでこんなに活動の幅が広がるのであれば、佐賀県の全市町が重ねれば、もっと可能性は広がるのではと池田さんは言う。

「ちょっと引っ込み思案の町もあると思うんですよ。なにをしたらいいのか分かんないな...。出前じゃないけど、こっちから出向いて、こういうことをしたらいいんじゃないかって一緒に考える。そんな交流もしてみたいと思います」

池田さんの直近の目標は、太良・鹿島の人みんなに多良岳に登ってもらうこと。

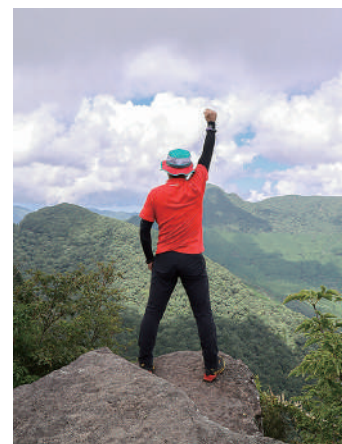
「町報や市報に登山案内を載せて、こんなに素晴らしい場所があるんだよっていうことを一番近くにいる人に伝えたいんですよ。多良岳の素晴らしさは『身近な自然』。浸透しつつあるからね、無理ではないと思う」。池田さんはそう熱く語ってくれた。



山の日記念登山にて、参加者に多良岳の植生、歴史やルートについて説明する池田さん。



山の日記念登山当日は、山の会議(仮)がきっかけで設置された山頂標柱のメンテナンスを行った。



座禅岩でポーズを決める「多良岳を愛する会」代表の池田清哉(いけだしんや)さん。



登山中は、ポイントごとに池田さんの丁寧な説明が入る。真剣な表情で聞き入る参加者のみなさん。

■多良岳を愛する会 地元の素晴らしさを語れる人を増やそうと中高生を対象にした「山の授業」や多良岳登山ツアーなど様々なイベントを開催し、登山道の整備や標柱の設置など環境づくりに取り組むなど山の素晴らしさを伝える団体。

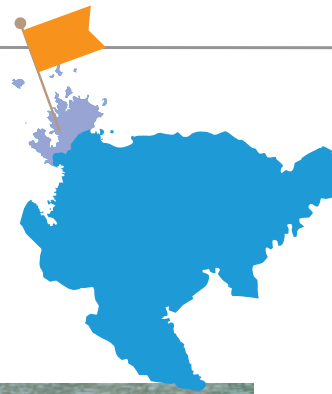


多良岳を愛する会

離島・半島ブロック

海と山が近い町の幸せな未来を住民みんなで考え、作り上げたい。

[第6回きてろ祭 in 玄海町 / 2023.10.15]



左/ファミリーショップやまぐちを営む山口ともさんは、健康にいい「まこも茸」を栽培し、商品化している。上/当日の目玉アクティビティの一つ、シーカヤック体験では、子どもたちが目を輝かせていた。

という思いが込められている。

毎年二回春と秋に開催され、2023年秋で六回目を数えた。主催するのは「玄起海」(溝上孝利会長)という地域おこしに携わるグループである。すなわち「玄海町から起こす」。このセンスあふれるネーミングからも自分たちの手で町づくりを成し遂げたいという熱意が伝わってくる。

メンバーの一人であり、きてろ祭の企画・運営を担っているのが中山敬子さんだ。本業は牧場の経営だが、生まれ育った玄海町の役に立つのならと三年前にパレアの指定管理者になった。

「海と山が身近にある。私にとってはそれが当たり前。それに温泉。この豊かな自然を宝として、なんとかこの町を活気づけたい。

2023年10月15日、きてろ祭の会場、玄海町の日帰り天然温泉施設パレアは、朝早くから集まった大勢の家族連れで賑わっていた。

地元の物産を販売する出店や人気のキッチンカーはもとより、仮屋湾クルージング、シーカヤックといったアウトドア・アクティビティもあるとあって、中にはどの順番で楽しもうかと思案げな人もいるほど祭りの内容は盛りだくさんだ。

そのきてろ祭だが、名前を聞いて日本各地に残る奇祭を思い浮かべる人がいるかもしれない。でも、「きてろ」は「来てくんろー」、つまり「気軽にお越しください」という意味。地域内外を問わず、たくさんの人に来てほしい



乗客の歓声が湾内に響きわたる仮屋湾クルージング。



玄起海の会長を務める溝上孝利(みそうえたかとし)さん。

■玄起海 棚田を後世に残すための田植えイベントや玄海海上温泉パレアでマルシェ「きてろ祭」の開催に加え、地元の唐津青翔高校生徒と連携し、流木を採取し、「炭窯・炭焼きづくり」など「山と海」を活かしたサバイバル体験など、町内外の交流人口を広げ、玄海町のファンを増やす活動を続ける団体。



玄海海上温泉パレア

ここパレアは地域住民の憩いの場であると同時に、そんな地域おこしに携わる人々のネットワークの拠点でもあるんです」と中山さん。

もう一人、会社勤めの戸部田義巳さんは、2024年夏から仮屋湾クルージングを事業化したいと意気込む。45分ほどの行程で仮屋

湾内を遊覧し、途中養殖マダイの餌やり体験を折り込みたいという。

そこに住む人々がそれぞれの立ち位置からアイデアを出し合い、一つずつ実現をめざす。今、玄海町の地域おこしは確実に前へ進んでいる。

佐賀県をアウトドアの聖地に。風光明媚な景勝地、七ツ釜で開催されたアウトドアイベント。

[サンセット SUP 体験 in 唐津市七ツ釜 / 2023.09.30]

「たいようアウトドア」代表の古川陽進さんは、唐津市肥前町生まれ。「佐賀県をアウトドアの聖地に！」という思いのもと、サップや川下りツアー、子どもたちに海遊びや野遊びの楽しさを伝えるアウトドア体験などを企画・運営している。

古川さんがサップを軸に据えたアウトドアイベントを催したのは、2023年9月30日のこと。場所は、唐津市呼子の七ツ釜。ここは、遊覧船に乗って柱状節理の発達した海洞をめぐる観光で有名な呼子の景勝地である。

集合時間の15時が近づくと、次々に参加者がやってきた。全員揃ったところで、古川さんから挨拶と説明があり、そのあと海岸へ下りて流木拾い。

というのは、サップで冷えた体を暖めるためのテントサウナが用意されており、それに使う薪として流木を利用しようという寸法である。

スタッフがテントサウナを稼働させる間に参加者は着替えを済ませ、いよいよメインイベントのサップにチャレンジ。

本当は、沈みゆく壮大な夕陽を眺めながらサップを楽しむという趣向(そのための15時



初めての人も経験がある人も風光明媚な呼子の海で、いざ、サップにチャレンジ!

集合)だったが、当日はあいにくの曇り空。それでも、呼子の海に心と体を解き放ち、全員満面の笑顔。海辺に響く歓声がみんなの満足感を表していた。

そして、最後はスタッフの手による海の幸をふんだんに使ったパエリアに舌鼓。そこには短いながらも充実した時間があった。

ちなみにフィールドを七ツ釜にしたのは、古川さんがこの地にかつてあったキャンプ場をなんとか復活させることはできないかと考えているからだ。「佐賀県をアウトドアの聖地に！」という思いを実現するための試みの一つである。



①「佐賀県というフィールドには隠れた素晴らしさがいっぱいあって、海でも山でもすごいポテンシャルを秘めている。だから、ここをアウトドアの聖地にしたいと願っているんですよ。」そう語る古川陽進さん。
②イベントの締めは、スタッフの手作り海鮮パエリアで舌鼓。左奥に暖を取ったテントサウナが見える。

嬉野・武雄ブロック

訪れる人も、もてなす側も楽しい、嬉しいという思いを共有する文化。

[暮らし観光まちあるき in 嬉野市 / 2023.12.16]



小雨が降る中、思い思いに暮らし観光を楽しんだ参加者のみなさん。背後に見える赤い屋根はシーボルトの湯である。



日本三大美人の湯として知られる嬉野温泉の公衆浴場、シーボルトの湯。



もともとは玩具店で、今は駄菓子屋。ご主人はパソコンの修理も手がける。観光ではまず立ち寄らないかも。

同じ旅をするなら有名スポットを駆け足で回るより自分の足で歩くほうが楽しいし、そこに地元の人との会話が加われば、もっと楽しくて印象深いものになることだろう。これは、至極当たり前のようであって、速さや効率を重視する今の時代には案外難しいことかもしれない。特に個人でやるとなると...

そこで、嬉野市に詳しい北川さんがアテンド役を買って出て、一緒に町を歩き、店やお

茶農家の方に話しかけることにした。

最初こそポカンとされたそうだが、数回やることで主旨に理解を示す人が増え、厚意的な施設や協力的な店が増えてきた。

たとえば、あるお茶農家では、外から来た人に「美味しい!」と言ってもらえた、ただそれだけで嬉しかったと喜ばれたそうである。

訪れる人も、もてなす側も同じように楽しい、そして嬉しい。そんな思いを共有する文化。暮らし観光の核心は、その点にあるのかもしれない。

「このイベントを始めて感じたのは、土地ごとにアテンド文化があったらいいなということです。そこに暮らす人が我が町を紹介したり、案内したりする。そんな文化が普段から普通にある。嬉野がそのさきがけになればと思っています」と北川さん。

2023年12月16日に開催されたまちあるきイベントは、あっという間に10名の定員が埋まり、県内外から集まった参加者の中には、遠く滋賀県近江市役所の観光課から視察にきた人もいた。暮らし観光がじわりと認知度を上げている証しとっていいだろう。

北川さんの案内のもと、一行は旅館大村屋そばの隠れ家的な焼肉店を皮切りに、シーボルトの湯、パソコンの修理もやってくれる駄菓子屋、表玄関は古着ショップなのに路地から入るとカレー店、同じ店舗の中に呉服店とスイーツの店が同居している不思議な店舗などを見て回る。

参加者の声をまとめると、「商店街が生き生きしていますね」「嬉野はザ・観光地という



表玄関は古着ショップだが、路地から入るとカレー店という造りに参加者一同、びっくり。



娘さんがパテシエの道に進んだ結果、呉服店とスイーツ店が同居することになったふしぎなお店。

イメージだったんですけど、普通の人が普通に暮らす町でもあるんですね」「町の人との間に壁がないというか、住んでみたくなりました」などさまざまだったが、歩くこと、町の人と語らうことで心がほぐれ、嬉野という街がより身近な存在になったようだ。

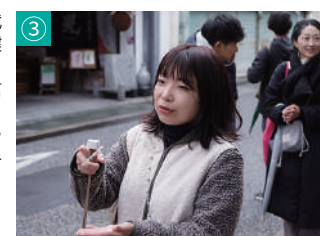
最後に、「ところで、本業のほうは大丈夫ですか?」と北川さんに水を向けたところ、「旅館の経営と同じ熱量で嬉野という土地を盛り上げたいんですよ」という答えが返ってきた。



①「暮らし観光」まちあるき委員会の代表であり、アテンド役を務める北川健太(きたがわけんた)さん。



②実行委員のひとり、小城市の音成信介(おとなりしんすけ)さん。



③同じく実行委員の久野裕子(くのゆうこ)さん。東京から移住して二年半になるという。

「暮らし観光」まちあるき実行委員会

観光客が一時的に地域の住民となり、ありのままの地域の暮らしを楽しむ「まち歩き」を開催し、関係人口や移住にも貢献するとともに、地域住民や参加者への誇りや愛着を育むなど人と人をつなぎ、まちの素晴らしさを発信し続ける団体。

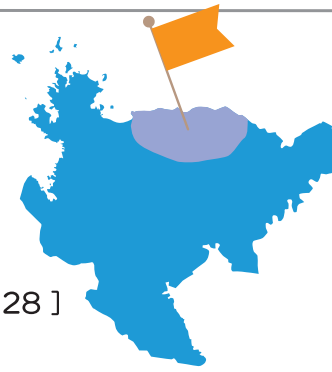


暮らし観光まちあるき実行委員会

脊振山系ブロック

豪雨災害からの復旧を機に 地域の再生とブランディングが始まる。

[七山ハロウィンオクトーバーフェスト in 唐津市七山 / 2023.10.28]



着ぐるみ姿がうけたのか、岡本泰成さんがマイクを握ると歓声が上がった。唐津市七山で開催された「七山ハロウィンオクトーバーフェスト」の開会式のことである。

七山で生まれ育った岡本さんは、農業を営むかたわら「七山むらづくり協議会」の理事長を務めている。同協議会は、地区にあった二社、七団体をまとめて、2021年10月にNPO法人化したものだ。

「県が提唱している『自発的な地域づくり』とは、自分たちのこと。県内で最も活発に動いているのは私たちだと自負しています。とにかく自分たちでやれることはなんでもやる。そういうスタンスでやってきたし、それはこの先も変わりません」と岡本さんは胸を張る。

たとえば、車道の脇にヤブを見つけると、

LINE一本ですぐに30人以上のメンバーが集まり、草刈りが始まるという。そんな行動力でこれまで地域の活動に取り組み、2024年からアウトドア型のトレーニング・ファームづくりに向けて動きだす予定だった。

ところが、2023年7月、七山周辺は記録的な豪雨に見舞われ、甚大な被害を受けた。中でも生活の基盤である農地の被害は尋常ではなく、住民の心痛は大きかった。

それを乗り越えて開催にこぎつけたのがオクトーバーフェストである。地域の人たちを元気づけるための初めての試みだ。

実は、開催の言い出しっぺは、県外からの移住者である地域おこし協力隊の野田宗作さん・早百理さん夫妻だった。山口県から三人の子どもたちとともに移り住んで、かれこれ



このフェストには、運営側に高校生や大学生が自主的に参加している。野田早百理さんと打ち合わせ中の唐津南高校の生徒のみなさん。



フェストの言い出しっぺの野田早百理さん。いつも明るく、アクティブ。

三年近くになる。

元銀行員の宗作さんは福山市、ドイツでキャビンアテンダントとして働いた経験のある早百理さんは福岡市の出身。子どもたちを自然豊かなところで育てたいという早百理さんの希望で、候補地に何度も足を運んだ結果、七山に決めたという。

「最初は不安もあったけど、すぐに打ち解けて受け入れてもらいました。私は自然農法で野菜づくりをやっているんですけど、毎日がとにかく楽しい！ キュウリやトマトづくりは周りに上手な人だらけなので、私はハーブや日本では珍しい野菜をつくっています」と早百理さんは笑う。

それを受けて宗作さんは「僕に野菜づくりは無理(笑)。元銀行員の知識と経験を生かして、生產品のPRや販路拡大といった農家のサポートに軸足を置いています」と語る。

そして、このフェストのもう一つの特徴と

して、高校生や大学生が運営に協力していることを挙げておきたい。

唐津南高校の生徒は、災害復旧のボランティアに携わったことが縁。大学生は、英語に堪能で観光に明るい早百理さんが神戸学院大学の客員教授を務めており、そのつながりでたびたび七山を訪れているという。

そのうちの一人、愛媛県出身の青山慎太郎さんは、大学で観光学を学ぶ4年生。七山の印象を「人のよさが一番ですね。楽しい思い出しかありません」と話してくれた。

そんな人情に篤い人々が暮らす七山には、豊かな自然と温泉がある。その強みを生かし、旧七山村時代から止まったままのイメージを再ブランディングして、地区全体をアウトドア・アミューズメントにしたいと岡本さんはいう。そのためには農地復旧が最優先。

今、協議会のメンバーは、無償ボランティアとして復旧に精力を傾けている。



自分たちでやれることはなんでもやる。このスピリッツがハロウィンオクトーバーフェスト初開催の原動力となった。後列右端が地域おこし協力隊、野田さん夫妻。



開会の挨拶をする岡本泰成さん(NPO法人七山むらづくり協議会理事長)。仮装しているのは、ハロウィンにちなんで。

■NPO法人七山むらづくり協議会 地域課題を自分たちの力で解決しようと地域おこし協力隊や地域の様々な人々と連携し、景観整備をはじめ七山地区の素晴らしさを広く発信し、七山へ多くの人を呼び込む様々な活動を続ける団体。



七山むらづくり協議会

合同発表会・大交流会

～地域の誇り・愛着・想いのバトンを未来へつなぐ～

[日時：2024.1.28 /会場：佐賀県庁 /参加者：80人]



挨拶に立つ山口祥義(やまぐちよしのり)佐賀県知事。



各ブロックのテーブルを回り、意見を交わす山口知事。

各ブロックで盛り上がり、交流を深める中で自発の炎がもっと広がってほしい

「山の会議(仮)」がスタートしたのは、2020年8月11日(山の日)のこと。2023年度には新たに有田ブロック、武雄・白石ブロックが参加し、四年間で10ブロックに広がった。

その10ブロックの主要メンバーが一堂に会して、2024年1月28日、合同発表会・大交流会が開催された。底冷えのする寒い一日だったが、会場となった佐賀県庁旧館4階は熱気にあふれ、挨拶に立った山口祥義知事も開口一番「こんなに盛り上がっていただいて嬉しい限り。ここまで熱い炎が燃え上がってきたことを誇りに思います」と感慨深げ。

続けて知事は、「イノベーションは、そこにはないものを作るのではなく、もともとあるいろんな価値が掛け合わさって、新たな価値が出てくるのだと思う。それぞれがアイデアを持ち寄っているいろんなことを考え、トライしてみようというところからイノベーションは生まれる。山の会議は、そういった点で最先端のことをやっていると感じています」とエールを送る。

そして、「いずれ山の博覧会を実施したいと思う。中身は決まってないけど、他所から

も参加できて、みなさんが自発的に取り組んでいることや、佐賀の山っていいよねということを見て歩けるような感じがいいかな。そのためにはこれからもそれぞれのブロックで盛り上がり、交流を深める中で自発の炎がもっと広がってほしいなと思う。ぜひ今の勢いで自発の炎を広げてほしいと思います」と締めくくった。

「山の博覧会」開催に向けて、さまざまなアイデアを活発に出し合う

会は、各ブロックの代表者による2023年度の活動報告(動画あり)から始まり、今後の課題や取り組みなどを交えて紹介。

参加者からは「動画は分かりやすくいいね」「刺激になることが多くて有意義」「ブロックごとの交流をもっと深めたい」といった声上がる。

途中、席を自由に移動して、異なるブロックのメンバーと交流する時間が設けられ、旧交を温める人、初対面で名刺を交換する人など和気あいあいのうちに進行。

後半は、前述した山口知事の挨拶のあと、知事が各ブロックのテーブルを回って意見交換。時間が許せば何時間も続きそうな熱気の

中、活発な意見が飛び交った。

そして、OK coffee (Saga Roastery) 福山徹さんをファシリテーターに最後の大交流会へと移る。

「さて、今日は山の博覧会を成功させるための種まきの一日とさせていただければ、とても有意義だと思います。未来に向けて私たちにはなにができる、どんな地域資源がある、どんな人たちとどうすることができるのか、活発な話をさせていただいたら、アイデアも湧きやすくなるんじゃないかというふうに思っ

ております」と福山さん。

それを受けて、再び各ブロックで意見を出し合い、たくさんのアイデアを発表する。棚田で鯉のぼり(有田)、子どもと農業とビジネスを掛け合わせたイベント(武雄・白石)、非公認ゆるキャラ祭り(嬉野・武雄)、海外から人を呼ぶ博覧会(脊振山系)、自転車を使ったイベント(伊万里)、基山を起点に多世代の融合を図るツアー(鳥栖・基山)、県内交換留学(離島・半島)など具体的なアイデアがいろいろ出て、会は大いに盛り上がった。



ファシリテーターを務める福山徹(ふくやまとおる)さん。



地域の未来について語り合う有田ブロックのみなさん。



それぞれの感性が触れ合う中で新しいアイデアが生まれる。



武雄・白石ブロックの江口智子(えぐちともこ)さん。



10ブロックの代表が一堂に集った合同発表会・大交流会の締めくくりは、地域の未来に向けてみんなで「佐賀さいこう！」ポーズ。

川田修三さん
ブロック間対談
池田清哉さん



佐賀の端と端をつなぐ 山の会議(仮)から生まれる化学反応。

佐賀の大自然を活動拠点に地域を盛り上げる山のリーダーと川のリーダー。太良・鹿島ブロックの池田清哉さんと、吉野ヶ里・上峰・みやきブロックの川田修三さんに、山の会議(仮)から生まれたもの、地域の未来像を聞きました。

一山の会議(仮)に参加されて、ご自身の取り組みや周囲に変化はありましたか？

池田 これまでは一住民として活動してたんですけど、県が応援してくれることによって仲間も増えたり、活動を応援してくれる人も増えたり、一言で言えば活動しやすくなりました。

川田 僕も同じです。前は他県で活動してたんですけど、佐賀に帰ってきて山の会議(仮)に参加して、県のスタッフが背中を押してくれるのでぐくやりやすい。山の会議(仮)で地元のみやき町の人たちと出会って、ずっと温めていたレジャートライアスロンという企画の実現に至りました。コースをつくったり、人をつなげたりしてゆく中で、あらためて地元の方々の方のよさを感じました。山の会議(仮)をきっかけに自分の町のことがぐく見えてきて、故郷を見直すきっかけになりま

した。

一山の会議(仮)から生まれる化学反応のようなものはありましたか？

川田 池田さんたちの太良・鹿島ブロックは、僕たちよりも先に山の会議(仮)に参加していた先輩で、いつも刺激をもらっています。太良とみやき町は、佐賀の端と端なんですよ。あつ



太良町・池田清哉さん。多良岳を知り尽くしたガイド。地元の小・中・高校で山の授業も行う。愛称はマウンテン池田。

ちの端っこで頑張ってる池田さんを見ながら、こっちも端っこで頑張ろうって思っています。

一佐賀の自然の素晴らしさを伝えるためには、川田さんのようにガイドを生業とされる人がもっと増えるといいと思います。

川田 こんなに素晴らしい自然がたくさんあって、なんでおらんのって思う。稼げれば、ガイドを志す後進の若い人たちが移住して来て食っていける。そこは意識してやっています。就農で移住して来る人は多いけど、ガイドで食っていくって大変なんですよ。今、そこをもっと盛り上げていこうと頑張って開拓しています。

池田 その辺がすごいなと思いますね。たとえば、太良町観光協会から「こういうことができないか」と言われても、みんなそれぞれ仕事があるから、すべては対応できなかったりする。川田さんの存在はやっぱり貴重だと思うし、相談することも多い。

一池田さんにも人を育てるという気持ちがあるわけですか？

池田 それこそ登山ガイドをするにあたってテーマがありました。将来を担う子どもたちに太良を好きになってもらいたい。これは絶対！もう一つは人材育成。若い人たちに、たとえば登山ガイドができたとか、自然や歴史に詳しくなってもらおうとか、そういったことはやっぱり取り組みの柱ですよ。

川田 やっぱり地域の自然や素晴らしさを子



みやき町・川田修三さん。自然体験教室SAGASOW代表。カヌー体験などを通して地域の自然の素晴らしさを伝える。自称、佐賀で最もカヌーに人を乗せている人。

どもたちに誇りに思ってもらいたいですよね。

池田 植物にしる、歴史にしる、ルートにしる、山のお師匠さんが今、自分の人生の最期を振り絞って一生懸命教えてくれています。

川田 こちらも同じです。僕らが頑張ることで、先輩方に火がついているんですよ。最後の仕事ばせないかんちゅうふうに。

一最後にお二人の熱い思いをお願いします。

池田 今までもやり続けてきたことなんですけど、やっぱり多良岳の素晴らしさを子どもたち、町の方々に広げていきたいですね。

川田 僕の野望は大きくて(笑)、佐賀全体のことを考えて、佐賀のよさっていうのを世界に向けてブランド化していきたい。それが最終的な目標ですね。

一多良岳は世界に羽ばたけますか？

池田 うん、自ずと世界のほうから来ると思うよ。こんなに素晴らしいところやけんね。

出張！「山の会議(仮)in 東京」

2023年11月5日、東京・有楽町で開催された「佐賀さいこう！暮らし&しごと体感フェア」にて「山の会議(仮)in 東京」として出展しました！

会場の一角に、タープの下にアウトドアチェアが並べられ、コーヒーの香りが漂うリラックスした空間では、池田清哉さん(太良・鹿島ブロック)と北川健太さん(嬉野・武雄ブロック)、音成信介さん(小城市)が佐賀県に興味津々の来場者をおもてなし。タープの下で膝を突き合わせ、佐賀の素晴



次々に訪れるお客さんをもてなす様子は、「出張！山の会議(仮)」の雰囲気でした。

らしさを伝えていく様子は、まさに“出張！山の会議(仮)！”。

ひっきりなしにお客さんが訪れ、リピーターも現れる、マウンテンコーヒーを淹れる池田さんの嬉しい悲鳴が聞こえるイベントとなりました！

黒髪山 [KUROKAMIYAMA]



多彩なルート、植物群、大展望と三拍子揃った佐賀県屈指の人気低山。

伊万里市、武雄市、有田町の二市一町にまたがる黒髪山系の主峰が黒髪山である。

クロカミラン、クロカミシライトソウ、カネコシダといった珍しい植物の宝庫として知られ、その数はなんと約1500種に上るといわれる。

また、古くからの山岳信仰の地であり、鎌倉時代からは黒髪大権現の称号で呼ばれる修験道の山として栄えた。加えて、鎮西八郎為朝(源為朝)にまつわる伝説や雄岩・雌岩の悲恋物語といった伝承も多数残っている。

県内のみならず北部九州一円からたくさんの登山者を集めているのは、そうした要素が

相乗してのこと。とりわけ鎖や梯子を使って登るアスレチックのような岩場の通過と、その先に待っている大絶景は魅力たっぷり。

いわば、豊かな自然、歴史、伝説、岩峰、大展望など登山に求められる要素をぎゅっと凝縮したのが黒髪山である。

さらには、登山口が複数あって、ルートも多彩。登山者自身のレベルに応じて登路を選べるのも人気の一翼を担っている。

中でも有田町の龍門登山口から取りつき、見返峠～黒髪山～蛇焼山～後ノ平～龍門登山口と周回すれば、黒髪山の素晴らしさをまとめて一度で楽しめる。



有田町・龍門登山口の広い駐車場。車で10分足らずのところには有田温泉もある。



登山口から見返峠までは、このほか美しい照葉樹林の森が続く。



黒髪山の核心部。鎖や梯子を使い、天童岩(山頂)へ向かってよじ登る。



北側山頂直下から望む天童岩と登山者。



胸のすく360度のパノラマが広がる天童岩の頂(山頂)。ここに立った誰もが、間違いなく黒髪山のファンになる。

見返峠までは、見上げるほどの巨木が立ち並ぶ自然林の森を沢に沿ってたどる。道中には野仏が点在しており、信仰の山としての面影に触れることもできる。

見返峠で小休止したあと、しばらくは緩やかな道が続く。途中、東にそって雌岩のそばの展望地に立ち寄り、奇岩・雄岩の眺めを楽しむ。ただし、足下は切り立った断崖だ。十分な注意が必要である。

展望地から元の道に戻ると登山道は徐々に急になり、やがて天童岩(山頂)の下部に出て、いよいよ黒髪山の核心部へ至る。

鎖や金属製のステップを使って急な岩場を慎重に登れば間もなく山頂で、低山とは思えない360度の大絶景が待っている。心ゆくまで展望を楽しもう。

復路は、危険な岩場の下り避け、蛇焼山～後ノ平を経由して下山する。後ノ平から先は、一部急降下するところがあるから慎重を要するが、途中に鬼ノ岩屋などの見所もある。二俣で往路と合流して西を取れば、ゴールの龍門登山口はもうすぐそこである。



見返峠の先で東にそると、開けた展望地に出る。そこから眺める雄岩は、麓から見るよりさらに大迫力である。



復路、後ノ平の先にある鬼ノ岩屋。ここから二俣に出るまで急な下りがある。慎重に歩きたい。



- 参考データ**
- ・標高=521m(単純標高差=約410m)
 - ・歩行時間=約2時間50分
 - ・スタート地点の位置=33度13分2.45秒 / 129度53分12.17秒 (Easting=104 4512 619*1)
- *「MAPCODE」は(株)デンソーの登録商標です。

基山 [KIZAN]



親子で登れるハイキングの山は、 野草の宝庫として知られ、人気は絶大！

佐賀・福岡県境に連なる全長約70キロに及ぶ脊振山系。その東端に位置するのが基山である。

663年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた大和朝廷は、北部九州の防衛体制を固める必要に迫られ、665年に基肆城を築いたとされる。それが今の基山で、はるかなる時空を超えて往時の面影を今も山頂部や山腹にとどめている。

いま一つ、基山は野草の宝庫としても名高い。とりわけ4月に咲くオキナグサは有名で、この花を見るために県内外からたくさん

の登山者を集める。ちなみに、オキナグサは絶滅危惧種。踏みつけないようにロープで保護されている。

そのほか、早春から秋にかけてツクシシヨウジョウバカマ、スマレ類、フナバラソウ、ツリフネソウといった花々が咲き誇り、目を楽しませてくれる。また、山頂部は平坦な草原を成し、遮るものが少なく、展望も優れている。

登山道は四方から延びているが、初めての場合は、メインルートと言える水門跡登山口から登るのがよい。



水門跡登山口の駐車場とトイレ。2018年の西日本豪雨のあとに新設された。



登山道の様子。山頂に向かって丸太のステップが続いている。



山頂周辺は遮るものが少なく、展望は抜群だ。宝満山、大根地山、宮地岳を望む。



基山の春の主角、オキナグサ。絶滅危惧種に指定されている希少植物である。



基山山頂。縦長い山頂部の東端に山頂標識と一等三角点がある。

水門跡周辺は、2018年7月の西日本豪雨によって甚大なる被害を被ったものの、今は完全復旧し、駐車場、トイレが新設された。ただし、人気のある山だけに土日祝日は駐車場が満車になることも珍しくない。早出するほうが無難である。

ルートは主に三本あって、登山道、道標ともによく整備されている。おすすめは、登山口からすぐの取りつき点から入山して山頂に立ち、コンクリート製の休憩舎の少し手前から下る時計回りの周回ルート。幼稚園の年長さんくらいなら子ども連れでも登れる。

何度か登ったことのある人や山慣れた人は、前述のルートよりさらに大きく周回する史跡めぐりルートを歩くのがおすすめ。

山頂から北にたどって北帝(412ピーク)に立ち、東へ下って東北門跡、米倉跡などを見て歩く登路が整備されており、基肆城時代の遺構である礎石群などを見ることができる。

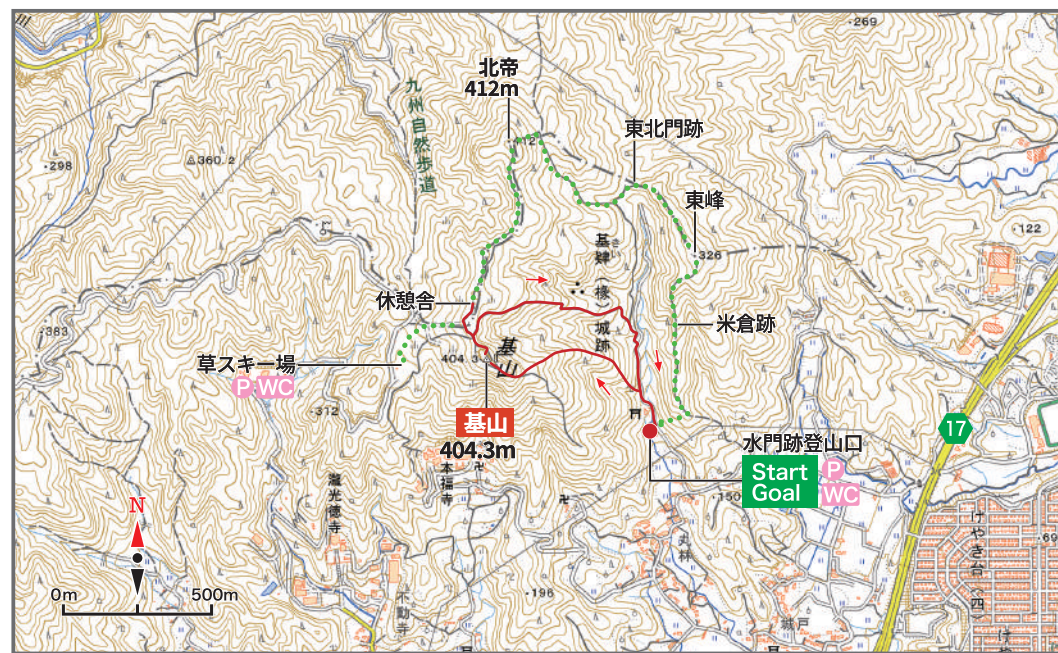
どちらを取るにしろ、草花を愛で、歴史的な遺構に思いを馳せながら、努めてのんびり歩くとより深く基山のよさを実感できる。



左端は休憩舎、右手は基肆城跡の石碑。草原を成す広々とした山頂部は、いつ登っても心地よく過ごせる。



米倉跡の礎石群。山頂から北帝、東北門を経てぐるっと周回する史跡コースの最後にある。



参考データ

- ・標高=404.3m(単純標高差=約220m)
 - ・歩行時間=約1時間20分
 - ・スタート地点の位置=33度26分26.50秒 / 130度30分57.74秒 (MAPCODE=55 062 456*54)
- *「MAPCODE」は(株)デンソーの登録商標です。

県知事からのメッセージ



「山」は、そこに暮らす人々だけでなく、沿岸部や平野部に住む人も含めたすべての人々に恩恵をもたらす「源流」です。

みんなで山を大切に想い、その未来を考える「山の会議(仮)」に、これまでの8ブロックに続いて、今年度は、新たに

有田、武雄・白石の2ブロックの皆様を迎えることができました。

それぞれのブロックで、互いにエールを送りあいながら、地域を楽しく、心地良くするアイデアの実現に向けてチャレンジが続けられています。そうした中で地域への誇りや愛着が高まり、活動の輪がさらに広がっていることを嬉しく思います。

佐賀県では、地域の方々が自ら知恵を出し合い、「本物の地域資源」を磨き上げ、トライ&エラーを重ねながら取り組む「自発の地域づくり」を後押ししています。

私自身、たくさんの想いがからみあって地域を動かす原動力となっている現場を目の当たりにし、人と人とのつながりこそが“唯一無二”の価値を生み出す佐賀の強みだと改めて実感しました。佐賀に生きる人、そして佐賀の山の素晴らしさをもっと世界に発信していきたいという想いです。

これからも、山に親しみ、山を楽しみながら、光輝く佐賀の山を盛り上げていきたいと思います。

やまぐち よしのり
佐賀県知事(地域活性化伝道師) **山口 祥義**



山の会議(仮) Facebook ページ

<https://www.facebook.com/yamanokaigi/>

発行

佐賀県 さが創生推進課

〒840-8570 佐賀市城内 1-1-59

TEL 0952(25)7505

FAX 0952(25)7423

MAIL sagasousei@pref.saga.lg.jp

